

情報の収集と発信の評価方法を考える

— 個人の作品をどのように評価するか —

〇〇〇立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇（情報）

研究の概要

本研究は、高度情報化社会の中で今一番期待されている教科「情報」の評価について取り上げたものである。

評価とは生徒の学習活動を向上、発展させるための重要な部分をになっている。さらに新教科だけに評価の適切性も重要な課題となっている。今回は情報C「情報の収集と発信」という単元の中で、生徒が作成した作品を通して、評価というものを考えてみる。

【キーワード】 評価、相互評価、自己評価、作品の評価、プレゼンテーション

1 はじめに

現代のハイテク社会の中で生活するにあたって、きわめて重要な科目になる教科情報が本格実施になり数年の年月が経った。私自身もこの教科を指導するにあたって教科の重要性は良く理解しているつもりである。しかし、毎年授業を進めるにあたっていくつかの疑問点が出てきている。今回、このような機会をいただいたので、今までの疑問点を少しでも解決できれば、さらに今後の授業の中でも生かすことができるかもしれないと思った。特に、毎年生じる疑問点の中で、情報の収集と発信の評価方法について考えることにした。

2 主題設定について

（1）主題設定の理由

評価は生徒に学習活動をさせる中で、指導方法、学習環境と並んで非常に大きなウェイトを占めている。特に普通教科「情報」は平成15年4月から新規に始まった教科なので評価の仕方が確立されていないと思う。また、評価は生徒の学習活動を定着・向上・発展させるための営みであるが、新教科だけにその適切さが求められている。そこで、この評価の部分に着目し、教科「情報」の評価とはどのようなものなのか今一度考え、さらに評価方法について検討したいと思う。

（2）研究内容

本校では3年次に情報Cを2単位として履修させている。3年次とあって受験科目と異なり生徒の取り組み方は千差万別で、情報に関する知識・技術も十人十色である。今回はすべての部分で評価を検討することも考えたが時間的制約もあり、単元をしばらく研究・考察をすることにした。

現行学習指導要領の「情報C」の目標には「情報のデジタル化や情報通信ネットワークの特性を理解させ、表現やコミュニケーションにおいてコンピューターなどを効果的に活用する能力を養うとともに、情報化の進展が社会に及ぼす影響を理解させ、情報社会に参加する上での望ましい態度を育てる。」とある。この中で一番重要な部分にあたる、「情報の収集・発信と個人の責任」に注目し、「現代社会の中でコンピューターなどの情報機器を効果的に使う能力」、「情報社会に参加する上での望ましい態度」という部分を中心に、評価を研究して、評価する上で参考になる事例はないかと調べることを主としたい。

3 評価について

ここで評価というものについて再度、考えてみたい。

一般的に評価とは二つの側面が考えられる。

ひとつは日常生活の中であらゆる対象について価値を判断し生活をする「価値判断の評価」であり、もうひとつは、あるひとつの行動について把握、判断、活用するという一連のサイクルからなる「問題解決としての評価」である。

これを学校現場で考えてみると「学習の発達に関わる具体的な事柄について価値判断すること。そして価値判断した結果に基づいて問題を具体的に解決することを通して、より良い学習、より良い発達を実現しようとする営み。」ととらえることができる。

また評価の目的も以下の5点が考えられる。

- ①生徒自らの学習状況に気づき自分を見つめ直すきっかけとなり、その後の学習や発達を促すための評価。
- ②教師の学習指導の資料としての評価。
- ③生徒に情報を与えるための評価。
- ④保護者の参考にするための評価。
- ⑤カリキュラム改善のための評価。

さらに、評価の機能について教育学者のブルームは以下の三つに分類している。

①診断的评价

ある教育活動の開始前に評価を実施し、学習の前提となるレディネスが事前に形成されているかを把握、判断し、教育的な決定に活用するもの。

②形成的評価

教育プログラムの開始後、教育目標に応じた成果が得られているかについて、指導過程の途中で適宜把握、判断し、その結果を以降の教育、学習活動の計画に活用していくもの。

③総括的评价

一定の教育活動が終了した際に評価を実施し、教育実践や学習活動を全体として反省的に把握するためのものであり、指導や学習を結果として評価するもの。

実際に我々が評価を考えるときには、③総括的评价をイメージすることが多い。

総括的評価は活動の結果を価値判断することに主眼が置かれており、指導の最終段階だけを評価しているので時間が経ちすぎているなど、評価に曖昧さが出てくることなどが予想される。これに対して②形成的評価は活動の過程に関するデータを意思決定に生かしていくので、評価情報を学習活動の改善に生かすことができる。教師にとっては指導の過程で評価を行い、その情報を指導の改善に生かすことが可能となり、指導と評価の一体化を具体化する有力な方法となる。生徒にとっては学習の途中で評価を行うので学習の様子を自己観察でき、学習状況を修正したり、改善したりすることに役立つ。

また、それぞれの評価方法について、次の2つの評価基準がある。

①相対評価

個人が所属する集団に一つの基準を採用し、それとの比較によって個人の成績を評価する。

- ・段階表示による方法。
- ・偏差値による方法。

長所

- ・評価基準を客観的に定められる。
- ・集団内の個人の位置付けが明確。

短所

- ・目標がどの程度達成できたかが明らかにされない。
- ・無用な競争心、不当な劣等感、優越感をもたせる。

②絶対評価

目標の達成度を基準に評価する。

- ・目標に達成したかどうかを合否する方法。
- ・到達度を数段階に分けて評価する方法。
- ・テストの得点をそのまま生かす方法。

長所

- ・目標に到達したかどうかを判明するので指導方法の適切さを知ることができる。
- ・生徒を目標に向けて動機付けできる。

短所

- ・客観的基準を採用することが困難。
- ・個人間および集団間の比較が困難。

	①診断的評価	②形成的評価	③総括的評価
評価の時期	・ 単元初め，学期及び学年はじめ ・ 授業の進行中	・ 指導，学習活動の進行中	・ 単元，学期の中間 ・ 単元末，学期末，学年末
評価の目的	1 適切な配置 ・ 学習の前提条件の確認 ・ 学力水準の確認・処遇に関する各種の適性の診断 2 学習困難とその原因の診断	・ 生徒の習得の有無 ・ 程度及び欠陥の発見 ・ 教師と生徒へのフィードバック ・ 治療的指導の方針の樹立	・ 指導計画の反省と改善 ・ 生徒の成績決定と記録，通知，証明
評価の用具	・ 自作の小テスト ・ 観察	・ 口問口答 ・ 簡単な小テスト ・ アンサーチェッカー	・ 自作テスト
絶対評価・相対評価の別	・ 絶対評価または相対評価による	・ 絶対評価中心	・ 相対評価中心，絶対評価によることもある

表 1 評価比較表

4 研究 1

(1) 研究 1 の概要

情報の収集・発信と個人の責任という単元から，次の 2 つの実習をして，比較検討をすることにする。さらに最終段階で評価をする内容を検討し考察する。

実習 1

- ・ クラス全体に同一テーマを与え，各自情報の収集を指示する。(収集方法は各自の自由)
- ・ 収集した情報を選別する。(選別方法は自由)
- ・ 情報を公開する。(公開方法は自由)
- ・ 公開した情報を評価する。(評価基準は定めない)
- ・ 収集方法・公開方法について検討する。(個人評価・グループ評価の結果をフィードバック)

実習 2

- ・ クラス全体に同一テーマを与え，各自情報の収集を指示する。(収集方法は各自の自由)
- ・ 収集した情報を選別する。(選別方法は自由)
- ・ 情報を公開する。(公開方法は統一)

- ・公開した情報を検討する。（評価基準は定めない）
- ・収集方法・公開方法について検討する。（個人評価・グループ評価の結果をフィードバック）

3年生普通科の文類クラス（1クラス39名）で、男女の比率もほぼ同じ（1：1），クラスの雰囲気もほとんど変わらない，真面目な一般的なクラスを2クラス選び，同一テーマを与え，1クラスは実習1，もう1クラスは実習2の方法で，情報の収集と発信の授業を展開した。

テーマ

あなたはある旅行会社の新入社員である。

今回のプロジェクトは，あなたの一番おすすめの旅行を紹介し，多くの参加者の気持ちを獲得してくることである。ただし，旅行紹介のプレゼンターはあなた一人ではありません。クラスメイトは全て他の旅行会社の社員です。

あなたはどれだけみんなの気持ちをつかむことができるか？

さあ，みんなの気持ちをつかみ取れ！

（2） 実習1・実習2の概況

ア 情報の収集方法（実習1，実習2ともに指示に異なる部分はない）

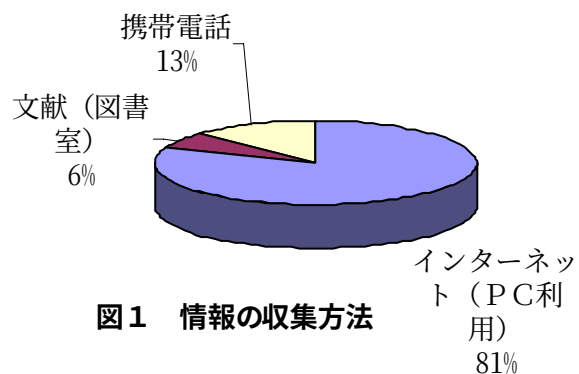


図1 情報の収集方法

最初に各自情報の収集に入るが，そのスタイルも多種多様であった。いきなりパソコンを開くもの，図書館に資料を調べに行くもの，携帯電話をあけるものなどである。予想外だった行動は携帯電話を開く行動だった。現在では携帯電話のサイトにも様々な情報があるので，旅行関係のものも沢山あるようである。

しかし時間が経つにつれてその様子も大きく様変わりしてきた。最初は書籍や携帯電話から情報を収集していた生徒が，いつのまにかコンピュータによるインターネットからの収集のみになっていた。これは，今の生徒達が活字から離れていることを象徴している。さらにインターネットの簡単さ，手軽さが現代っ子には受けているようである。

しかし，全員が同じ方法だと同じ評価しか与えることができない。どこかに何か優劣を付ける判断材料はないものか考える必要がでてきた。

イ 情報の選別（実習1，実習2ともに指示に異なる部分はない）

全体を見ても選別している様子は全くない。文献はほぼ全部丸写し、全く疑う様子もない。好みによってサイトや書籍を選別している姿は見られるが、内容や信頼性による選択は全く考慮には入っていないようである。このことに対しては授業中に説明や学習の機会を作らなければならないと思う、今後の検討課題である。

ウ 情報の公開方法の概況（実習1 公開方法は自由）

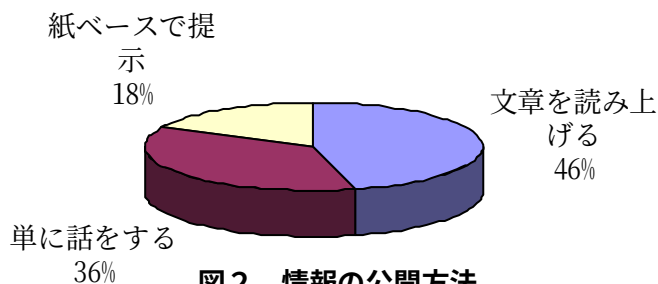


図2 情報の公開方法

実習1の最初の課題である情報の公開方法である、このクラスには公開方法の指示を出していない。本人の自由に公開する方法を決定して良いことにした。

文章を作り読み上げるもの、ただ単に話をするもの、紙に写真を印刷し見

せるもの、と色々な公開方法があった。生徒個人のオリジナリティがあり、発表としてはとてもおもしろかった。しかし、いざ評価となると評価する基準部分が見えてこない、見えないと言うよりも何をどのように評価するのか、採点者側は基準の判断が全くできない。

採点者側はある一定の基準の中で評価を考えているので、その基準が曖昧、または無くなるとその判断は付けにくくなる（付けられない）。

こちらから発表形態や方法を示さず生徒のオリジナリティを優先すると、我々が考えている以外の発想や展開があり、非常におもしろい授業が期待できることは事実である。しかし、それを評価に結びつけるところがとてもやっかいな話になってしまう。この部分を解決できないものか、歴史の浅い教科ではこのような部分でのノウハウが少ないような気がする。

ウ' 情報の公開方法の概況（実習2 公開方法は統一）

実習2では、プレゼンテーションソフトを使うように公開方法を統一した。

最初にプレゼンテーションソフトの使い方を説明し、ソフトの持つ特性を生かし公開作品を作成するように指示した。

しかし、個々でコンピューターを使う能力は千差万別であり、趣味で普段から利用し手先がなれている者から、今回久しぶりに触った者まで能力の差が歴然とあった。

だが、この様な状況も時間が経つにつれだんだんと少なくなった。

作品制作が進むにつれて、さまざまな作品ができあがってきた。色々とテクニックを凝らす作品。さらにそのテクニックにさらなる工夫を追加する作品。自分自身この様な素晴らしい作品が思いつくかどうか解らないぐらい素晴らしい作品も見受けられた。しかしその反面、他人の作品をいとも簡単にコピーしてしまう者、さらにアイデ

アをそのまま無断使用する者等，自分自身の考えを全く持たずに他人のアイデアのみで作品を完成させる者も数人見受けられた。今世間では情報のマナーの悪さが目立っている。このような場所でも，この問題はあるのだと感じた。今後，情報マナー等の授業はしっかりとやらなければならないと思った。

公開方法を統一したので作品自体がみな同じような形になってしまった。最初にできあがった作品を参考に次の者がまねをするようで，発想や作品の流れがほとんど同じになってしまい，作品自体はあまりおもしろみがないように思えた。作品の評価については，同じ手法で作成しているので評価基準は付けやすいように思える。作品作成の進度にその都度評価をしていけばよいのでその点では良いと思う。

エ 公開情報の評価状況（実習1，実習2とも指示に異なる部分はない）

公開した情報の評価に入るが，評価基準を設けていないので，その内容は多種多様であった。しかし，評価した個人によって意見に偏りが見られることも事実である。普段のクラス内での人間関係がそのまま現れているようである。それをその課題の評価にするのはちょっとおかしいのではないかと感じた。でもこの様な状況になることはおおかた評価を始める前から予想が付けられた。評価基準が自由で，好きなもの，好みのものを勝手に評価しているので当然の結果と考えていいと思う。今回の展開では予想どおりである。

オ 収集方法・公開方法の評価

収集方法は，何も先入観が無ければ色々な方法が試せるが，どうしても周囲のやっている方法に目がいてしまい，気になるようである。最悪には自分のやっている方法が間違っているような錯覚に陥り，ついには方法を変更してしまうパターンが非常に多かった。どうしても自分の方法に自信がもてないようである。初めての試みなので仕方が無いといえばそれまでなのかもしれないが，非常に良いものを作っていて途中で方向を転換してしまうものも多く見受けられた。もう少し自分の作品に自信を持って取り組めば，この様な状況からは脱出できるはずである。しかし評価はとてもしづらい，基準の付けられない曖昧な部分が多すぎる。生徒自身の評価の中でも同じ疑問や悩みを持っているもの多いことに気づかされる。また自己評価に対しても曖昧な評価基準に苦労しているようである。

5 実習1・実習2のまとめ

- (1) 基準の部分をすべて削った実習内容にしたのが研究1である。基準の曖昧さがあり、評価するのに苦勞をするのが伺える。すべてを自由にすると、基準を決めることはとても難しくなり、いい評価は与えられないと考えられる。今後評価を考えるには何処で何を評価するのか、基準の部分をしっかりと把握しなければならないと考える。しかし、評価のみを優先すると生徒の学習活動が制限され、おもしろくない単一的な授業展開になってしまうおそれもある。特に教科「情報」のように、実習が設けられている教科では柔軟で自由な発想が求められているはずである。授業展開の仕方での重要な部分が削られているようでは、それは失敗な授業ではないか。自由さと制限には適度な割合が必要となる、その適度な割合とはどのようなものか、またどのくらいなのか、次の研究2で考えてみたい。
- (2) **実習1・実習2**で考察・検討で課題になった部分を再度検討し、その部分を変更して研究2で検討・考察をする。その変化を分析し両者を比較検討して、内容をまとめてみる。その中で今後の評価のあり方を再度考えてみたい。また新たな問題の発生を予想し再検討し次回の課題にしたい。

6 研究1の考察および反省点・解決策

研究1の実習1、実習2の比較結果から次のような感想を持った。(最終的に生徒の作品を評価するにあたって気がついたこと。)

- ①評価判断材料が少ない。
- ②作品の比較が単一的である。
- ③作品の作成時の情報が少ない。
- ④時間によって評価基準が変化してしまう。

評価をするにあたってこのような状況では問題があるという結論にいたりどのようなシステムを構築すれば上記のような問題点を少なくできるか検討した。

解決策

- ①判断材料が少ないという問題には、予め判断材料になる部分を列挙しそれぞれに基準を設ける。
- ②比較が単一的という問題には私自身の評価だけではなく他の人の眼も借りて評価することにした、TTで授業を展開しているならもう一人の教員に任せるのが良いのだが、本校では一人で1クラスを指導しているのでそういう訳にもいかない。苦肉の策として授業中の生徒全員を評価者として考えた。自分の作品以外をすべて評価し、点数を付け、感想を書かせた。
- ③作品作成時の情報が少ないという問題には毎時間、その日の目標をこちらから指定し、その進行状況进行评估した。
- ④時間によって評価基準が変化する問題には、その時間毎に目標を決めるようにした。

7 研究2

研究1では内容の異なるもので評価基準を作成しようと思ったが、研究1の考察・反省点・変更点にも書いてあるが、研究2では研究1の変更点を中心に研究考察をするように考えている。

研究1との変更点

- ①判断材料を多くする。(事前に列挙し基準を確認)
- ②作品の比較を沢山の眼で判断する。(クラス内の全員の評価を利用する)
- ③作成時間毎に目標を定め、そこまでで小評価する。
- ④毎時間評価しているので、最後にすべてをいっぺんに評価しない。

(但し最終の発表は時間の関係上日時がばらばらになってしまうが、そこは今後の問題点として残す。)

その他の条件に関してはすべて同様とし、実習にはいることにする。今回は生徒全員に評価をしてもらうつもりなので、プレゼンテーション自己評価シート(図3)とプレゼンテーション相互評価シート(図4)を用意した。

伝えたいことは予定通り言えたか	⑤	④	③	②	①
	コメント				
準備は万全か	⑤	④	③	②	①
	コメント				
自分なりの工夫を考えたか	⑤	④	③	②	①
	コメント				
自分の総合評価	⑤	④	③	②	①
	コメント				
感想					

図3 プレゼンテーション自己評価シート

番号	氏 名	工夫	わかりやすさ	声	時間	気持ち	合計	評価の理由等（コメント）
1	〇〇〇							
2	△△△							
3	□□□							
4								
5								
39								
40	×××							

各項目 5 点満点，合計 25 点で各自採点。

図 4 プレゼンテーション相互評価シート

8 プレゼンテーション評価シートを見て

相互評価シートの評価理由等は各自に差し障りない程度に返却した。生徒自身の厳しい評価にかなりの反響があった。途中で立ち直れないような厳しい評価を受けた者もいたが、大多数の生徒は素直に評価を受け止めていた。しかし、若干の生徒は不満を爆発させ素直に助言を受け入れようとはしなかった。

今後、優秀な作品を作る段階としては、他人の評価を聞き、何処が悪いのか、何故いけないのか、何処をどうしたらよいのか等を素直に受け入れなければならないと考え、本人達を諭した。果たしてしっかりと理解してくれていたか、今後の作品に期待したい。

生徒達の感想（プレゼンテーション自己評価シートから）

- ・心の準備ができなくて緊張した。
- ・わかりやすく簡単にまとめたつもりが、かえってシンプルすぎてインパクトが無かった。
- ・有意義な時間を過ごした。
- ・もっとプレゼン上手になりたい。
- ・思ったことを上手にしゃべるのはむずかしい。
- ・機会があればまたやりたい。
- ・初めからきちんとやればよかった。準備もいま一步で反省している。
- ・国のこともよく解ったし、みんなに伝える難しさも解った。
- ・またやってみたい。
- ・がんばってまとめたがもっと伝えることがあったと思う。調べて知識が増えたことはよかった。
- ・発表の練習が少なくて焦った、スライドは人と違った観点で作れてよかった。
- ・もう焦っちゃって全然まとまらなくて、ほんと後悔です。
- ・自分が用意したものは全部出し切りました。
- ・みんなの前で話す、というか自分のいいたいことを伝えることはこんなに大変だとはおもいませんでした。もっと上手に言えるように頑張りたいです。これからの授業が楽しみです。
- ・「ガチガチの固いプレゼン」ではなくて「楽しいプレゼン」を目指して発表しました。だからみんなから笑い声が聞こえたときは「成功だ！」と思いました。
- ・先生の「おもしろかった」の一言が本当にうれしくて自分的には大満足です。
- ・みんなの評価が気になります。
- ・今回のプレゼンを通して色々分かったことがあるので、次回やる機会があれば、もっとみんなを引きつけるようなプレゼンをやりたい。
- ・いい経験になった。
- ・みんなの作品を見て自分の作品の良いところ、足りないところがよくわかった。
- ・他の人の作品を見て見習えそうなものがあったので参考にしたいと思った。
- ・みんなのプレゼンから学ぶことが沢山あり勉強になりました。
- ・いい経験になった。自分はこういうのに弱いと知ることができた。良い経験になった。強くならなきゃと思いました。

生徒の感想に共通する部分は次のとおりである。

- ・準備の時間が短かった

時間には当然、限界があり、時間内に作業を進める指導はきちんとしなければならぬ。とくに時間の配分を予め指示しておけば良かったと思う。今回はある程度の時間の配分の指示を出したが、厳密さがなかったようである。自分自身の反省でもある。

- ・ 次回はきちんとやりたい

一度リハーサルを行い、自分たちの中で再度、作品や話し方等を確認させたほうがよかったようである。発表の事前準備を行うことで、もっと自信をもって発表ができる生徒は多くいるはずである。リハーサル等の事前準備の時間も考慮に入れ時間の配分を検討したい。

- ・ 人前で話すことは難しい

普段、何気なく話しているだけでキチンとした話し方はしていないようである。もっと話す機会を与え、人前でキチンと話せる生徒を指導することは今後の重要な課題である。

- ・ 伝えたいことをしっかりと伝える

自分の頭の中では分かっているけど、説明となると何から説明したらいいか全く分からない、順序立てができない、と考えている生徒が非常に多い。これは人前で話すことの難しさと同じことが原因であるように思える。

人前でものを順序よく説明するためには知識をしっかりと整理し、自分自身がそのことに対してそれなりの理解をしていなければならない。また経験も数多くこなすことが要求される。生徒は今回が初めての、経験である者がほとんどである。今後はさらに経験を積みさせたいと思う。また教科「情報」はこの様な経験を積みさせられる教科だと思う。今後は授業の時間を充分にとり、経験を積みせ、さらにより良い効果が得られるように考慮したい。本来生徒は経験がないのでここまでの作品しかできない。しっかりとフィードバックする時間があれば、素晴らしい作品が期待できると思う。

今回、プレゼンテーションの作品を評価している間にこの様な感想を持っていた。また生徒の感想にも他の生徒作品を評価するにあたって自分と同じ感想を持った生徒が沢山いたこと、何となくただ授業を受けていただけではないと、分かっただけでも非常にうれしく思った。ここに一部、生徒の作品を掲載したい。

この作品は生徒の評価が一番高かったものである。実際のプレゼンテーションの姿もしっかりとしたもので郷土の千葉県を題材にした面白い作品である。



図5 生徒の作品例



図6 発表風景

9 考察

作品評価について以下の点に注意した。

- ・評価項目の確認

作品評価の判断材料を多くし、事前に作品作成者に評価する部分を知らせておく。

- ・評価の平等

作品を担当教員一人ではなく、複数の眼で判断すると主観が少なくなり評価が平等になる。

- ・途中過程の評価

作成毎に作成目標を定め、時間毎の小評価を行う。

- ・同一時間内の評価・評価基準の平等

授業内で作品を発表する時間を確保する。

今回の研究にて以上の4点が考察として考えられた。

今までの授業の中でも気にしていたつもりだが改めて考え直すと、時間の経過とともに変化しない評価の基準をしっかりと持ち、沢山の眼で作品を確認し、平等に判断すること、さらに、作品作成の途中の過程も評価の対象としてもよいことなどは、つい見落としがちである。

最後の発表で本当の力を発揮できないことは多々ある。しかしそれだけで作品が失敗という訳ではないと思う。途中の評価を作成者自身に返すと（評価のフィードバック）さらに作品が良い物に変化してくる。しかし、残念であるが今の時間の中では制約があり、そこまで生徒に評価を返せる時間が確保できない。今後、カリキュラムの検討を考えて作品評価のフィードバックの時間を確保したい。

今回の研究ではフィードバックの時間は確保できなかったが、評価シートで生徒個人にその他の生徒の様々なコメントを返却した。想の中にみんなの意見が参考になり、今度またやってみたいという意見があった。そのような感想があるということは様々な意見を聞き再度作品を手直しすることでさらにより作品が出来上がることが分かった。次の機会にはもう一度この取り組みを行い、今まで以上の作品を仕上げてもらいたい。

最後に、作品評価とは最終結果の評価ではなく、生徒の学習状況をチェックする、刻々と変化する生徒自身の作品をどのように変化していくか、またどのように学力が変わっていくか調べていくことであると思う。特に実習等で作品や発表を多く利用する教科「情報」では教員・生徒を含めた相互評価をすることが有効であろう。生徒自身は自己評価や相互評価を行うことで作品の特徴や問題になる部分を考え、さらにそれを検討することにより、新しい見方や考え方を身に付ける。さらに他の生徒からの指摘で、自分では気づきにくい点を知ることができる。またプレゼンテーションでは聞き手が自分の発表を理解してくれたかどうかを知ることができ、情報伝達が上手くできているか確認できる。

今後、評価に関してはさらに研究が進み、作品や生徒自身による自己評価などに代わる新たな基準が必要になるだろう。

10 おわりに

今回の研究を通して感じたことは、作品の作成過程の評価の大切さである。

今回、評価というものを考えるにあたって、もう一度評価基準を見直すことによって自分自身の評価スタイルを見直す良い機会であった。

自分自身は今回までの生徒作品の評価を怠けていたわけではない。しかし今回の研究を通して反省しなければいけない点が数多く出てきた。そのことを考察することで生徒作品の評価研究につながるような気がする。今後さらなる評価基準を考えていきたい。

最後に、この研究にご協力、ご指導いただいた方々に深く感謝します。

11 参考文献

- (1) 情報教育シリーズ 情報教育の学習評価 観点と基準 岡本敏雄・西野和典 丸善株式会社
- (2) 情報教育の実践 教科情報の実践から
<http://www.urayasu.tokai.ed.jp/kyouiku-naiyou/joho/joho-34.htm>
- (3) 相互評価システムを利用した教科「情報」の授業実践
情報処理学会第67回全国大会
- (4) 教科「情報」のホーム 評価について
http://www.apec.aichi-c.ed.jp/project/joho/n_hyouka/hyouka_2.htm
- (5) 教育評価ノート
http://www.intweb.co.jp/teian/kyouiku_hyouka.htm
- (6) 評価の基礎理論
<http://homepage3.nifty.com/globalcitizen/hyokanokisoriron.html>